【383】

氏　名（本籍）	余田真也（よでんしんや）（兵庫県）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　乙　第　2533　号
学位授与年月日	平成23年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**赤と白と黒の遠近法** －インディアンをめぐるアメリカ文学地図－

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	宮本陽一郎
副　査	筑波大学教授	文学博士	鷲津浩子
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	齋藤　一
副　査	明治大学教授		菅　啓次郎

論文の内容の要旨

本論文のタイトル「赤と白と黒の遠近法」は、合衆国文学を構成するネイティヴ・アメリカン（赤色人）とユーロ・アメリカン（白人）とアフリカン・アメリカン（黒人）の関係性、ならびにインディアンの文学表象において「赤」と「白」と「黒」の相互作用が形成する磁場を指すものである。したがって、本論文はネイティヴ・アメリカンによる文学をいわゆる合衆国文学の下位分野に位置づけるのではなく、むしろそうした定式化や範疇化を回避する重要な契機としてインディアンに着目する。

序章では合衆国文学におけるインディアン表象の系譜と先住民系作家による文学の系譜の概略をたどり、それらの系譜の接点を構成する諸主題を整理するとともに、そこに伏在する問題の複雑性を、ヨーロッパ人とチェロキー人の混血としてアメリカに生まれながらもカナダ市民権を得てブラックフット人に同一化する現代作家トマス・キングを例にして考察する。

続く本論の最初の二つの章では、19世紀後期から20世紀前期にいたるインディアン表象を題材にして、プリミティヴィズムやアメリカニズムの観点からヨーロッパ系アメリカ文学の文化横断的な想像力を検証する。第1章では、アメリカズ（南北アメリカ）の歴史の再考を通じて新世界的な経験の本質に迫り、新たなアメリカ論の提示を図ったウィリアム・カーロス・ウィリアムズの『アメリカ人気質』を題材にして、そこに見られる異種混淆性や文化横断性を検証し、その現代的な意義を明らかにする。第2章では、インディアン戦争が終了し、先住民や荒野を讃えるプリミティヴィズムの文化が隆盛を誇った時代において、南西部インディアンへの憧憬を謳った白人作家たち（メアリ・オースティン、ウィラ・キャザー、ゼイン・グレイ、オリヴァー・ラ・ファージ）の先住民表象の意味を、同時代の民族学における先住民研究の多様化とも切り結びながら考察する。

続く二つの章では、前二章と同じ19世紀後期から20世紀前期にいたるインディアン政策の変遷を背景として、同時代の先住民作家による文化横断の軌跡をたどる。第3章では、平原諸部族に対する同化政策が本格化した時期に白人式の学校教育を受けていわば同化見本となったスー族の著述家たち（チャールズ・イーストマン、ルーサー・スタンディング・ベア、ジトカラ＝シャ）の自伝的な著作を導きの糸として、先住民

社会とアメリカ社会を媒介する文化交渉の諸相を検証する。第4章では、先住部族社会の変容や弱体化が進んだ時期に、小説家になることを夢見た二人の先住民作家モーニング・ダヴとダーシー・マクニクルに注目し、インディアン・ニューディール政策との関連を検証し、これを1970年代「ネイティヴ・アメリカン・ルネサンス」の先駆として評価する。

先の四つの章で検証したアメリカ・インディアン文学における先住民と白人の関係性をふまえながら、続く二つの章では黒人も含めた三方向の関係性を考察する。第5章では、アメリカの先住民関係史において特権的な場所といえるインディアン・テリトリーとしてのオクラホマに注目し、チェロキーとオーセイジに関係する作品を書いた一群の作家（ジョン・ロリン・リッジ、ワシントン・アーヴィング、ローラ・インガルス・ワイルダー、エドナ・ファーバー、リン・リグズ、ジョン・ジョゼフ・マシューズ）の作品を俎上に載せて、文学小史にまとめつつ、人工的な実験国家アメリカの縮図ともいうべきオクラホマにおける先住民と黒人の関係を照射する。第6章では、人種主義時代の先住民と黒人と白人の関係を豊穣に表現した二人の南部人（ロング・ランスとウィリアム・フォークナー）を文化史的な視座から論じ、60年代以降の先住民系文学との相関において評価を試みる。

第二次大戦後の終結から70年代レッドパワーにいたる時期には、口承文学と記述文学の両方の遺産を受け継ぎ、汎インディアン性や異種混淆性に開かれた「ネイティヴ・アメリカン・ルネサンス」が開花した。第7章ではその代表といえる三人の作家N・スコット・ママディ、レスリー・マーモン・シルコウ、ジェラルド・ヴィゼナーを俎上に載せ口承伝統の再利用と帰属意識の生成の観点から考察する。第8章では、1970年代のインディアン・ブームを、オルタナティヴ・カルチャーとの相関において回顧し、同時代のネイチャーライティング（アーネスト・キャレンバックやエドワード・アビーなど）におけるエコロジーとインディアンの関係を考察し、さらにアフリカ系やメキシコ系といったマイノリティ作家（アリス・ウォーカー、クラレンス・メイジャー、ルドルフォ・アナーヤなど）の文学におけるインディアンの意味を探求する。

本論最後の二章では、1990年代から21世紀にいたる先住民系文学を対象にして、「赤と白と黒」の関係性を検証する。第9章では、「コロンブス500年祭」を機に新世界の歴史記述を大胆に再考する作品として、シルコウのアポカリプス文学『死者の暦』とヴィゼナーのポストインディアン・ユートピア文学『コロンブスの相続人』、さらにはトマス・キングのトリックスター・メタフィクション『緑の草、流れる水』を取りあげる。第10章では、現代先住民系の人気作家シャーマン・アレクシーの作品を題材として、先住民の伝統文化とポップカルチャーとアカデミズムの関係を解析しながら、20世紀末から21世紀への転換期を生きる新世代作家の文学営為の核心に迫る。

「赤と白と黒の遠近法」にもとづく「インディアン文学史の再構成」とも言える本論文は、アメリカ合衆国の東部、南西部、北西部、中西部、南部、オクラホマ、米加国境、米墨国境などの諸地域に残された文化横断の軌跡をたどり、エスニックな現場とポストエスニックな想像域とを往還し、文化の媒介者や越境者たちの交渉の現場を検証し、その文化史的な意味を問うものである。終章ではそうした本論の議論を総括し、さらに現代のインディアン表象における新たな徴候にも触れる。

審査の結果の要旨

1992年の「コロンブス500年祭」以来、合衆国ではアメリカ先住民文学研究がかつてない隆盛をみて、豊かな研究成果を生んだ。本論文はそれらと比して全く遜色のない学術水準に達している。主な考察対象は20世紀の先住民文学であるが、それを遥かに越えて、植民地時代から9.11以降の現在に至る文学作品・映画・文化人類学についての圧倒的な博識を動員しつつ論じきっている。今後のわが国におけるアメリカ先住民文学研究に与える恩恵は多大である。本論文は、わが国におけるアメリカ先住民文学研究の里程標として記念

されるべきものである。

本論文のさらに先進的な点は、アメリカ先住民文学を合衆国文学のなかのサブジャンルとして位置づけるのではなく、合衆国文学そのものを再考する契機としている点である。「赤と白と黒の遠近法」というタイトルが物語るように、本論文はアメリカ先住民文学それ自体以上に、アメリカ先住民とヨーロッパ系アメリカ人ならびにアフリカ系アメリカ人とのあいだの文化交渉に焦点を合わせる。これを通じて本論文は、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ、ウィリアム・フォークナー、エドナ・ファーバーのような白人作家や、アリス・ウォーカーを始めとする黒人作家についても、大胆な読み直しを行っている。本研究はその意味で合衆国文学研究全般にインパクトを与える研究と言える。

さらに「合衆国」文学研究という参照枠を越えた、「アメリカズ」文学研究（南北アメリカ研究）という参照枠をすでに第1章において提起しそれを貫いている点では、21世紀のアメリカ文学研究の路程に確かな一歩を刻むものである。近年の「ポストエスニック」「ポストトライバル」をめぐる議論を十分に咀嚼しつつ、独自の「アメリカ文学地図」を再構築する本論文は、「アメリカ」そして人種・エスニシティーの研究方法に、新たな指針を与えるものである。

以上のように画期的意義を持つ本論文に、敢えて問題点を捜すとすれば、それは本論文の企図の大きさと裏腹な関係にある。「赤と白と黒の遠近法」を通じて「アメリカ文学地図」を再構築するというヴィジョンを完遂するためには、さらに多くの白人作家・黒人作家を検証することが期待される。また細部の情報量があまりに多いために、ときとして「アメリカズ」文学研究という視野が埋没して、アメリカ先住民文学の作家研究・作品研究に後退してしまう傾向も見られなくはない。読み手にとってのアメリカ先住民文学の意義を見失わない論述が期待される。

以上のような問題点は、本論文の画期的な意義を減ずるものではなく、むしろそれゆえに期待される課題である。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。